

蘇芳集

着脹れて

青山

丈

或る日いきなり着脹れてしまひけり
着脹れて週刊誌だけ買つてくる
子供等へと降りてくる都鳥
居なくなるやうに綿虫とんでゐる
白鳥の随分そばに人が居る
机から時時立つて去年今年
川上へ歩いて行つて初詣

大綿

峰岸よし子

高き木にたかき鳥ごゑ神の留守
一葉忌路地はくまなき月あかり
急くものに家路のありて冬の月
こともなく終るいちにち枇杷の花
昨日よりけふの喪心花
木枯を戻りて飯の噴くにほひ
大綿を見てゐてこの世かるくなる

女ふくよか

宮尾直美

この空を鶴来るといふ月の道
うそ寒や煌と灯れる通夜の家
枯れなむとして蠅螂の石の上
海光や鴨の自在を見て飽かず
しぐれつつ暮れつつ堰の水白き
立てかけし箒に影や花八ツ手
ルノワールの女ふくよか冬薔薇

木 枯 八木下 末黒

行人坂 小川 美知子

養生の波音にゐる文化の日
西空の茜にそまる文化の日
ほがらかに銀杏落葉の虚空かな
赤松のあたりあかあか冬に入る
初冬のまだやはらかな空の青
木枯や墓の浮浪者どこへやら
木枯の渦が渦生む墓の前

狐 火 吉田 幸敏

水仙の芽の動き出す一葉忌
小止みなき箒の音も時雨寺
十二月八日の赤子瞬かす
約束へ急ぐ地下道近松忌
悴みて願ひの石に触れもせず
狐火や眼鏡掛けても外しても
冬蝗大道へ出て迷ひなし

発つ鷺の脚より雫冬近し
道の名の行人坂や夕しぐれ
たそがれの白金台の石路の花
誰か人が傘差せば差す冬もみぢ
花のやうに抱かれてをりぬ七五三
語るとき人美しき冬灯
どこかから吹かれて来たる落葉かな

こゑの過ぎりて 木内 憲子

つましさは夜寒の肩といふ辺り
こゑの過ぎりて晩秋にはたづみ
秋冷の畳を踏んで忌を修す
踏みきたるものつくづくときやけしや
秋逝かすひとつふたつともの忘れ
帰り花大事なことは何度でも
愛日の肌着きれいにたたみけり

門 灯

清水裕子

小流の音の鈴めく小六月
冬桜散る茶筌塚扇塚
盤石の亀裂に日射し冬の蟻
人待ちの桜落葉に染まるかな
街路樹を行く寂しさも十二月
冬草に風起つ気配暮の方
門灯の人の気配に点く寒さ

雨青し

下平直子

ゆく秋やわづかな風に水光り
赤とんぼ夕日明かりの村ひとつ
畦道の草踏む音も冬に入る
小春日や沼の形に水光り
玻璃流る十一月の雨青し
一椀の味噌汁にほふ夕時雨
眼裏の父と語りて霜夜更く

秋の風

富田正吉

灯が点いてわが家となりぬ秋の暮
言ひ負けて夜中に桃をむさぼりぬ
気が遠くなるほど吹くよ秋の風
露草が人を感じてゐるらしや
おほぞらの涯のあをあを葛の花
担がれて幟が入る紅葉山
どこへでも歩いてゆけと秋の風

聖 樹

野路斉子

扉を叩く素手の風音十二月
我に来し鴉よ毛糸帽欲しや
ことごとく聖樹ヒマラヤ杉などの
窓の灯の森まで届けクリスマス
賜ひたる懐炉猫より猫に似て
寒むやすぐ転ばないでと言はれても
文鳥のやさしさ肩に年明くる

石工屋 別府 優

石工屋の間口五間の吊し柿
初冬のやたら肩甲骨ほぐす
一の酉けふは一粒万倍日
大まかに地図書く勤労感謝の日
縁側に温み身にある鶏頭花
故郷の湯にゐるやうに日向ほこ
ひとり居に魔のさすやうな冬夕焼

ふた駅を 前田 陶代子

土手ま直ぐますぐに桜紅葉かな
川原のわづかな木影昼の虫
鳥渡るころや風鳴る舟着場
秋風や門前蕎麦に鳴門巻
明るさへ枝張る雑木もみぢかな
ふた駅をともしに帰りぬ小望月
秋深し欄間の彫に灯の透けて

榎櫃の実 松原 ふみ子

黄落や日に三便の只見線
蓑虫の鎧ふさみしき揺れ止まず
吾も彼も昭和のこども文化の日
出来秋や海に尽きたる千枚田
どう積んでみても歪に榎櫃の実
陶房に宵の灯点る木の葉雨
山塊を据ゑ一天の星月夜

